

# 大賞の映画を見て

千 賀 真 順

三十四年度ブルーリボン賞第一位を受けた邦画「キクとイサム」及び洋画「十二人の怒れる男」を同時に観賞する機会を得て感銘と共に考えさせられた。此の両映画とも従来の基準を異にして演技と真実を主とした事も日本映画界の進歩を示し好感が持てる。

邦画の今井正作品「キクとイサム」は戦争の落子で黒ン坊と蔑視される姉弟の愛情を主とした人間の心情を描いて異色がある。さすがに脚本水木洋子のせん細な筆致と共に主演女優賞に輝く北林谷栄の老婆の演技の素晴らしさ。東北の寒村に貧苦と戦いつつ、黒ン坊の姉と弟の孫をかかえて苦悩に堪えつつ生きる姿を刻明に描き、しかも珠数を持ち念仏を唱えて耐え行く哀さ、強さに同情の涙をそる。姉弟愛の哀歓を織込んで身近に共感を催す。唯教界人として欲を言えば、村の庵主（尼僧）さんがその家に雨やどりする。手には美事な西瓜を持つている。本尊さまに供える積りであろうが、桑の葉を摘んで帰つて来た老婆・姉弟に食べさせてくれたら、どんなにか好感をもてるのと思う。併しこの庵主さんの姿が今の僧尼一般の姿とも見られないだろうか？考えさせられた。併し全体とし

## 随想

### 幻想と現実

成 田 俊 治

私は古いや夢のお告げ、又其他迷信を決して信じてはいない。しかし、ここに述べようとする事実を現代の科学でどの様に説明すればよいのであろうか。

× × × × ×

丁度私が専門学校に入学した年だったから、もう十年程前のことである。或日中学で特に親しくしていたA君の来訪を受けた。友人達の卒業後の消息等を語り合っている中、Aは真面目な顔付で、実は事情があつて大阪へ行く、それについて母親の年回でもあるし、最後に君にお参りして欲しい」と云う。私も彼の母が学徒動員中に亡くなつたことを知っているので気軽に引受け、彼の自宅で回向をしたのである。彼は翌日父親と妹と三人で挨拶に来、そして大阪へ行つたのである。

それから数年たち、Aから何の便りも無く、私も大学へ進み、すっかり忘れてしまつていた。所が数年前の或夜私は不思議な夢を見た。

大阪の或る道（勿論場所は分らない）を私が歩いていた。小さな露路の前まで来た時、Nさんではないですか、よく来て下さ

て感銘深き秀作である。

洋画「十二人の怒れる男」も又異色、一時間半余のストーリーが裁判所の一室のみで終始する珍しい作品。一少年の父親殺人事件で白・黒を決定する十二人の陪審員の審議の展開を描く。黒十一対白一の第一回投票。白の一票が一人の生命を死か無罪の法定の鍵である。白と見た一人は検事の論告に解せない一点を考え考えて飽くまで譲らない。十二人の怒りが次第に高まる。と共に白の一票は事件疑点を挙げる度に、黒十対白二↓黒六対白六となり、更に白八対黒四と白十対黒二↓遂に白十一対黒一となる。蒸し返る暑い部屋で汗をふきふき十二人の怒りは続く、審議は進む。机をたたきあわや暴力かと思う激怒は息づまる画面に展開するが、最後には白十二対黒〇、満場一致白と判定して物語は終る。十二人の怒りを超えてお互に何処の誰人とも分らないままに帰途と云う映画。

思うに一人の真実が十一人を動かすことがある。多数を尊重すると共に少数も又尊重されなくてはならない。真実は一人でも如何に尊く強いかを教える。「我にたとえ死刑に行わるとも」と真実を貫かれた宗祖も斯くやと思念される。

観賞後いとも快適、近頃楽しく且つ感銘を催し、ビール一杯を傾けつつ先程の印象を温めた。思出して一筆に。

(教授)

## 随想

いました。もう来て下さると待つていた所です。と私の手を取り部屋に案内し仏壇の前に坐らされたのである。よく見るとA君の写真がかざつてあり、位牌もある。A君亡くなつたのですか。ええ。私はここで既に法服を着ており、お勤めを始めていたのである。

翌朝目を醒ました私は、妙な夢を見たものだと思つていたが、別に気にしなかつた。所が次の夜もその次の夜も三晩続けて同じ様な夢を見たのである。さすがに私もA君のことが心配になり、心当りに連絡してみたが何の消息も得られなかつた。

現在でも何の音信も無く消息不明のままである。

× × × × ×

勿論、私はA君がどこかで生きていることを信じている。しかし、当時の私が宗教に関して無関心ではないにしても、未だ宗教の何たるかを把握し得ず、又夢を見る原因として挙げられている浅い眠りも青年時代には少く、潜在意識として以前のことが出て来たとすれば、唯A君の自宅へ一度参詣したことのみしかない。にも拘らず、A君の死に結びついていることは、迷信を信じない私の心のすみに一抹の不安を抱かせるのである。

大阪のどこかで、日本のどこかで元気に活躍されていることを心から祈つている。

(助手)